

## 新刊 Book Reviews

□近田文弘：桜の樹木学 A5. 208 pp. 2016. 技術評論社. ¥2,280 + 税. ISBN 978-4-7991-9C3045.

著者は、樹木が種子から芽生えて、成長し死を迎える、一生を研究することが樹木学だという。欧語訳は示されていないので、はっきりとは断定できないが、*dendrology* だとすると、例えば *Oxford English Dictionary* や Jackson の *A Glossary of Botanical Terms* (1928) が提示する、‘the study of trees’ [樹木についての研究] の語義を発展させたものであり、評価したい。しかし、本書の目次立てをみると、1章 サクラの分類学、2章 サクラの植物学、3章 人と桜、なっていて、これは著者のいう樹木学と齟齬をきたしている。

3章の人と桜の内容は、上記定義による樹木学の範囲から逸脱しているのではと訝るが、英国に本拠をおく、*International Dendrology Society* の最近の年報をみると、樹木と人間の関係なども大きく扱われている。著者の樹木学の理解はこうした背景を踏まえてのものなのかもしれない。であるならば、樹木学の定義を修正する方がよくないだろうか。

表題のことはさておき、サクラについて幅広い視点から丹念かつ丁寧に解説がなされており、とかく栽培品種の名称や解説に中心が置かれている他のサクラについての類書に較べたら出色であり、サクラに興味を抱く多くの方々に推薦したい。

サクラ類の属レベルの分類は詳しく解説されているが、属を細分する分類法が旧ソ連や中国の政治と関連がありそうなことや、日本では本書の評者である、大場秀章 (2007 年) の誤った観察によって広がっていると読めるような記述がなされているのはいかがなものだろうか。旧ソ連と中国は、バクチノキ類を除き、サクラ類が極めて多様性の高い地域であり、Koehne, Ingram, Pojarkova や愈らの研究にも係らずその分類には多くの問題が残されている。属レベルの分類は決着がついたことでないにしろ、旧ソ連邦植物誌でのサクラ類の属レベルの分類が、‘科学的というより、政治的な理由により作られたのではないか

と疑っている’、と書くのはこの地域のサクラ類の多様性に真剣に向き合ってきた分類学者に対する冒瀆に聞こえる。旧ソ連邦植物誌で提唱された分類体系は中国でも採用され、近年米国との共同編集で刊行された *Flora of China* (2003 年) でもサクラ類 (亜科) を、ソ連邦植物誌に原則則り、*Cerasus* を含め 9 属に区分して扱っているが、この分類体系選択は、ルイセンコ問題とは異質の、政治の埒外のことであろう。

せっかく勝木俊雄 (2015 年) の一般向きでもある岩波新書で、分類の問題が整理され、要点が正確に示されているのに、大場が根拠に上げたという縫合線や花柄の認識不足だけを根拠に、*Prunus* から *Cerasus* を区別する意味がないと書いているのもどうかと思う。[煩雑になるので詳述は避けるが、大場は縫合線の語は使用していない。外形的にその部分に生じる縦方向の溝や窪みの有無について記しているのみである。縫合線の語は普通子房壁全体を対象にして用いられるもので (スモモやアンズの果皮表面の窪みに相当する)、内果皮由来の核にのみ縫合線の語を用いるのは不適切だろう。] 属レベルの分類体系の構築は今や形態上のデータだけではなく、むしろ分子情報に重きがおかれている。

旧ソ連邦植物誌や中国植物誌や大場が用いている分類体系は、大場も指摘しているように分子データとも完全な整合性がない。やがて再考を迫られる体系であることは、大場を含め [近田は上記大場での分子遺伝学についての見解を無視している] サクラ亜科の研究者間のコンセンサスであるといってよい。つまり分類体系とは現時点での対象植物についての科学的認識のうえに構築されているものなのである。せっかく分類体系に触れるのなら、グローバルな視点で論評して欲しかったと思う。

気づいた誤りを 2 つ挙げておく。83 ページの子房の図で胚珠は上向きに描かれているが、サクラ属の多くは胚珠は下向きであり、倒生である。114 ページの右図には 2 つの芽を頂芽としているが、頂芽は普通一つである。(大場秀章 H. OHBA)